

風呂敷など包装資材メーカーの三景（本社名古屋市北区清水、藤原保彦社長、電話052・951・2737）は、新商品のデザインなど風呂敷の新たな可能性を探るため、初の産学連携を愛知淑徳大学と始めた。学生の感性、アイデアを商品づくりに生かすのがねらい。訪日外国人の増加に加え、2020年には東京五輪開催を控える中、若い力を借りて日本の風呂敷文化を発信したい考えだ。（大蔵敦生）

風呂敷文化を世界へ発信

三景と愛知淑徳大の産学連携は、いちいち信用金庫浄心支店が橋



風呂敷について調査し、グループごとに発表する学生

三景 淑徳大と産学連携

渡しをした。

同信金の森山雅光名古屋地区統括支店長は「取引先の事業拡大につながれば」と提案したことがきっかけ。三景の水谷省吾常務も「若い学生の感性をヒントに成長したい」と初の産学連携を決断した。

今回の産学連携は、同大メディア

アプロデュース学部の宮田雅子准教授のゼミ生が協力している。宮田准教授は「学生が手掛けた作品が実際の社会で評価される機会は少ない。今回の産学連携は良い機会

会。最終的に採用、不採用にしろ学生に経験してほしい」と意義を強調した。

このほど連携をスタート。ゼミ

生は五つのグループに分かれ、まず、風呂敷の役割や機能を調査した。学生からは「色や柄で伝える思いが異なる」「包む文化は日本独特の文化」などと意見を交わした。「若い世代にとって風呂敷は普段使わないもの。新しい使い方を提案したい」と意欲的な声もあがった。

11月に各グループのデザイン案を発表する予定。水谷常務は「最終的にどんなアイデアが出てくるのか楽しみ。商品化につなげていければ」と期待している。

若い感性でデザイン、用途提案

2016年7月21日（木） 中部経済新聞 3面より
この記事・写真は中部経済新聞社の承諾を得て転載しています。